報告：

臨床現場における外来語・略語・隠語の 使用状況と看護師の認識

用語集の作成

桐田久美子^{*}，岡崎寿子^{*}，八代利香^{2*}，宮内信治^{*}，
Gerald T. Shirley^{*}

本研究では、臨床現場における看護師間のコミュニケーションの向上に寄与することを目的に、臨床現場における外来語・略語・隠語（用語）の使用状況と、看護師の認識を明らかにし、困難な状況をもたらした用語を一冊の用語集として作成した。A 県内の6つの病院の看護師計1,000名を対象に、独自に作成した自己記入式質問紙を用いたアンケート調査を行なった。また、特に意味が理解できず困難な状況をもたらした163の用語を抽出し、用語集にまとめた。回答者748名の97%が用語を使用するとし、理解できなかった用語に遭遇した経験がある者は81.6%であった。そのうち、用語の使用により問題が発生したと回答した者は9.1%であり、「相手に伝わらなかった」、「処置が遅れた」等が理由としてあげられた。用語の必要性について「とても必要」、「必要」と回答した者は合わせて44.5%であった。理解困難な用語として回答数が多かったものは、「ステル」、「タキル」等であった。簡潔で素早く相手に伝えられる用語の使用は、看護業務を遂行する際に大きな役割を担っている一方で、医療事故の発生の危険性が内在していることが示された。また、生命に関わる重要な臨床現場で働く専門職者として、看護師一人一人が用語の正確な意味を理解し、適切に使用していくことの重要性が示唆された。

外来語 略語 隠語 看護師 用語集

・ 緒 言

近年、日本社会では、国際化や高度情報化、高度科学技術の進展に伴い、外来語・略語・隠語が頻繁に使用されている。医療の臨床現場においても、多くの情報に対応しながら効率の良いケアを行なうために、外来語・略語・隠語の

使用が日常的となっている¹⁻³⁾。しかし、その便利さ故に、外来語・略語・隠語が臨床現場で濫用されると、医療職者間でのコミュニケーションに支障をきたす恐れがあると考えられる。また、不明な言葉の確認作業をしなかったことが原因で誤解が生じ、医療事故を誘発する可能性も否定できない⁴⁾。

意味が理解できなかったことにより、医療職者に困難な状況をもたらした用語とそのときの状況を明らかにすることは、医療職者間のコミュニケーション上の問題を少しでも軽減するために有効ではないかと考える。しかしなが

^{*} 〒870 1201 大分県大分市大字廻栖野2944 9
公立大学法人大分県立看護科学大学 人間科学講座 言語
学研究室

^{2*} 同 広域看護学講座 国際看護学研究室
(受付：2006年7月19日)

ら、臨床現場で一般的に使用されている外来語・略語・隠語を調査する研究は数少ないのが現状である。そこで、本研究では、臨床現場における外来語・略語・隠語の使用状況と、それに対する看護師の認識について調査し、明らかにする。そして、困難な状況をもたらした用語を一冊の用語集として作成し、臨床現場における看護師間のコミュニケーションの向上に寄与することを目的とする。

．方 法

1．調査方法・対象

平成17年7月25日から9月22日の期間に、A県内の6病院に勤務する全看護師計1,000名を対象に、独自に作成した自己記入式質問紙を用い、アンケート調査を行なった。質問紙は、各施設を通じて、対象となる看護師に直接配付した。記入後の質問紙は、密封可能な封筒に入れて任意で封をしてもらい、2週間から4週間後に回収した。

2．調査内容

調査内容は、対象者の属性、外来語・略語・隠語（以下、用語とする）の使用の有無とその状況、理解できなかった用語に遭遇した経験の有無とその状況および対処法、用語の使用による問題発生の有無とその内容、患者やその家族（以下、患者等とする）に用語の意味を尋ねられた経験の有無とその対処法、用語の必要性の認識とその理由、である。

3．用語の定義

広辞苑第4版⁵⁾より、外来語は「外国語で、国語に用いるようになった語」、略語は「語形の一部を省略して簡略にした語」、隠語は「特定の仲間の間にだけ通用する特別の語」と定義する。

4．倫理的配慮

アンケート調査への協力は、対象者の自由意思と同意に基づくものとし、無記名で実施した。対象者には本研究の主旨を説明し、調査を中断したくなった場合はいつでも中断が可能であること、参加辞退、途中中止等が生じてても対象者に対する不利益は一切ないこと等を説明し

た。収集したデータは本研究以外では使用せず、施設名や個人名が特定されないようにコード化処理を行なった。

5．分析方法

Excelにて単純集計を行なった。

6．用語集の作成方法

アンケート調査から、特に意味が理解できず困難な状況をもたらした用語に注目し、臨床現場で一般的に使用されていると考えられるこれらの用語を抽出し、一冊の用語集にまとめた。用語集の編集・構成は、「看護学生・ナースのためのカルテ用語がすぐ引けるメディカル英語辞典」⁶⁾、「医学・看護用語のカタカナ語・略語便利辞典」⁷⁾を参考にした。また、用語集に掲載する用語の意味は、「看護学生・ナースのためのカルテ用語がすぐ引けるメディカル英語辞典」⁶⁾、「医学英語ハンドブック」⁸⁾、「ステッドマン医学大辞典」⁹⁾から引用した。

．結 果

1．質問紙の回収率および回答者の属性

質問紙の回収数（率）は751名（75.1%）であり、有効回答数（率）は748名（99.6%）であった。回答者の性別は、女性96.3%、男性3.3%、無回答0.4%であった。年齢層別の構成、勤務経験のある診療科に関しては表1,2に示した通りである。

2．用語の使用とその状況

用語の使用については、「使用する」97.2%、「使用しない」2.8%であった。各用語の使用頻度は、外来語・略語・隠語ともに「時々使う」が最も多かった。また、使用場面に 대해서는、「申し送り（88.2%）」が最も多く、次いで「処置中（62.3%）」「記録（52.5%）」の順であった（表3）。使用理由（複数回答）に関しては、「簡単で使いやすいため（88.7%）」、「他のスタッフが使用するため（36.9%）」、「対象者に意味を理解されないため（36.5%）」の順であった（表4）。

3．理解できなかった用語に遭遇した経験の有無と対処法

理解できなかった用語に遭遇した経験は、

表1．年齢階層別の構成（％）

20歳代	40.9
30歳代	31.1
40歳代	15.5
50歳代	12.2
無回答	0.3

表2．勤務経験のある診療科（％）

内科系	66.4
外科系	65.4
産婦人科	18.9
小児科	15.2
手術室・中央材料室	10.4
ICU	8.2
泌尿器科	4.9
精神科	3.3
外来診療	2.9
皮膚科	2.4
眼科	2.0
救急救命	1.7
耳鼻咽喉科	1.6
NICU	1.3
透析室	0.9
リハビリテーション科	0.9
内視鏡科	0.8
放射線科	0.4
結核病棟	0.3
その他	2.1
無回答	0.5

「遭遇した経験がある」81.6％、「遭遇した経験がない」16.6％、無回答1.9％であった。また、遭遇した時の対処法の内訳（複数回答）に関しては、「その場で同僚に聞いた（54.6％）」が最も多く、次いで「後で同じ病棟の同僚に聞いた（37.4％）」「理解できるまでその場で何度も聞いた（28.1％）」の順であった（表5）。

4．用語の使用による問題発生の有無とその内容

理解できない用語に遭遇した経験のある者の

表3．用語を使用する場面（％）

申し送り	88.2
処置中	62.3
記録	52.5
臨床現場以外	12.0
スタッフ同士の会話	2.9
その他	2.6

表4．用語を使用する理由（％）

簡単でつかいやすい	88.7
他のスタッフが使用する	36.9
対象者に意味を理解されない	36.5
統一されていて共通理解がある	2.6
習慣となっている	1.9
チームの仲間意識が高まる	1.8
作業効率を良くする	1.2
カッコいい	1.0
日本語に訳しにくい	0.3
その他	1.1

表5．理解できなかった用語に遭遇した時の対処法（％）

その場で同僚に聞いた	54.6
後で同じ病棟の同僚に聞いた	37.4
理解できるまでその場で何度も聞いた	28.1
そのままにしておいて後で調べた	27.0
後で同じ病棟の同僚以外のスタッフに聞いた	11.1
その場で調べた	4.4
分からないままにしておいた	2.5
医師に聞いた	1.8
その他（緊急度により臨機応変に対応した、専門職に聞いたなど）	0.7

うち、用語の使用による問題発生が「ある」とした者が9.1％、「ない」とした者が86.0％、無回答5.0％であった。

発生した問題の内容としては、「相手に伝わらなかった」、「調べる時間を要した」、「他病

院・他病棟から移ってきた患者の記録で分からない略語があった」、「同じ略語でも意味が複数あり捉え方が違った」、「単位が分からず医師に何度も確認したため処置が遅れた」、「医師からの指示を申し送ったが理解されておらず実施されていなかった」などであった。

5．患者等に用語の意味を尋ねられた経験の有無と対処法

患者等に用語の意味を尋ねられた経験の有無については、「ある」50.8%、「ない」44.9%、無回答4.3%であった。また、対処法の内訳（複数回答）に関しては、「正しい意味を伝えた（84.7%）」が最も多く、次いで「他の人に尋ねるよう伝えた（10.8%）」「曖昧な意味を伝えた（10.5%）」の順であった（表6）。

6．用語の必要性の認識とその理由

用語の必要性については、「とても必要」2.0%、「必要」42.5%、「どちらとも言えない」41.0%、「あまり必要ではない」4.1%、「必要ない」1.6%、無回答8.7%であった。

「とても必要」、「必要」と答えた理由は、「申し送り・記録の際など限られた時間を有効に使うため」、「未告知の患者などに情報が漏れないようにするため」などであった。「どちらとも言えない」の理由には、「記録に書く際には不必要であるが、医療職者間での会話の時は便利」、「緊急度にあわせて臨機応変に使い分ける」などであった。「あまり必要ではない」、「必要ない」の理由には、「患者や家族と話す際には必要ない」、「経験年数が少ない人にとっては戸惑いの原因となるので必要ない」、「今後の情報開示に向けた動きを考慮した場合、調べなければ分からないような略語などは適切でない」などがあった。

7．用語の抽出と用語集の作成

理解できなかった用語に遭遇した経験がある者に対して、理解できなかった用語、その意味、遭遇した場面の状況について質問し、意味が理解できず困難な状況をもたらした用語を抽出した。理解困難な用語として回答数が多かったものは、順に、「ステル」13人（死亡する：独語 sterben を略し動詞化した語）、「タキ」

表6．患者等に用語の意味を尋ねられた時の対処法（%）

正しい意味を伝えた	84.7
他の人に尋ねるよう伝えた	10.8
曖昧な意味を伝えた	10.5
はぐらかした	3.4
臨機応変に対応した	2.1
後で調べて伝えた	1.6
一緒に調べた	1.3
何も伝えなかった	0.5
医師に説明してもらうよう伝えた	0.5
自分で調べるよう伝えた	0.5
その他（病名に関しては医師から説明があると伝えたなど）	0.8

7人（頻脈になる：tachycardia を略し動詞化した語）、「SAH」4人（クモ膜下出血：subarachnoid hemorrhage の略語）、「ケモ」4人（化学療法薬：chemotherapeutics の略語）、「ゼク」4人（死体解剖：独語 sektion の略語）、「ルーチン」4人（定型業務：routine の外来語）であった。

抽出した用語は、コミュニケーションに使用されていると考えられるもの73語、記録に使用されていると考えられる略語90語の、全163語である。前者は五十音順、後者はアルファベット順に並べ、用語、読み方、本来の語、意味、の順に掲載し、一冊の用語集とした（写真1）。用語集の大きさは、横12.9cm、縦18.3cmで、用紙のサイズはB6とした。1ページに6～7語掲載し、全29ページである。文字のフォントは、用語をMS明朝20ポイント、その説明をMS明朝18ポイントとし、横書きとした。また、目次と本の見方についての説明を1ページ掲載した（写真2）。

・考 察

1．用語の使用状況と使用される理由

用語の使用率は、対象者全体の97.2%であり、理解できなかった用語に遭遇した経験がある者の割合も81.6%と高かった。臨床現場の看

看護業務全体の中で記録に要する時間の割合が高く、看護師が患者のケア以外に費やさなければならない時間が多大に存在することは、以前から指摘されていることである¹⁾。看護師間の口頭での情報伝達についても同様であり、看護師が用語を用いてケア以外にかかる時間を短縮しようとするのはやむを得ないことと考えられる。今回の調査においても用語を使用する理由として、「簡単で使いやすいため」、「作業効率を良くするため」があった。用語の使用によりどの程度時間が短縮できるのかは明らかではないが、日夜増加する医療情報に効率良く対応するためには、看護師の用語使用は必然の帰結であると推測される。

<p>独立行政</p> <p>独立行政法人とは、国が行政の業務を遂行するために、法律で定められた目的と業務範囲に基づき、独立した法人格を有する組織である。</p> <p>① 独立行政法人の設立は、法律で定められ、その目的と業務範囲が明確に定められている。</p> <p>② 独立行政法人は、国から独立した法人格を有し、その業務範囲内において、自主的に事業を行うことができる。</p> <p>③ 独立行政法人は、国から独立した法人格を有し、その業務範囲内において、自主的に事業を行うことができる。</p> <p>④ 独立行政法人は、国から独立した法人格を有し、その業務範囲内において、自主的に事業を行うことができる。</p>	<p>和歌</p> <p>ワカ</p> <p>和歌は、日本古来の詩歌形式で、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>① 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>② 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>③ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>④ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p>
<p>和歌</p> <p>ワカ</p> <p>和歌は、日本古来の詩歌形式で、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>① 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>② 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>③ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>④ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p>	<p>和歌</p> <p>ワカ</p> <p>和歌は、日本古来の詩歌形式で、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>① 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>② 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>③ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p> <p>④ 和歌は、五音（五音）と七音（七音）の組み合わせで構成される。</p>

写真2：用語集掲載例

割」といった言葉は、患者等に動揺や恐怖心を抱かせる恐れの高いものであると考えられる。江藤ら²も述べているように、直接的な意味を表さない用語の適切な使用は、医療・看護情報の秘密保持など、情報管理において有用な場合もある。用語の使用は、医療職者にとっては、医療行為を円滑に行なうという視点から、患者等にとっては、余計な心理的負担を避けることができるという意味において有益であると推察される。

今回の調査において、理解できなかった用語に遭遇した経験がある者は81.6%であった。先行研究においても、カルテや看護記録、および口頭での連絡・指示の60~90%近くにかたかな語、略語が使用されており、「用語の意味が分からない」、「職場によって用語の使用方法が異なる」など、調査対象者のほぼ全員が困った経験をしていた³⁾との報告がある。用語の使用は、看護師にとって便利なものではあるが、今回の調査で明らかとなったように、問題発生の要因ともなりうる。それらは単に、用語の意味が理解できなかったというだけではなく、医師からの指示が実施されなかったというインシデントの発生にも関係していた。用語の濫用には、医療事故の発生の危険性が内在していることが裏付けられたと考える。

用語が濫用される現状と、患者情報の開示に対応していくことを踏まえ、2000年に日本看護協会から「看護記録の開示に関するガイドライン」¹¹⁾が発行された。この中で、看護記録で行なうべきこととして、「略語を用いる時は、各施設のマニュアルに記載され認められている略語のみを用いる」¹¹⁾とされている。これに伴い、現在、多くの施設で用語の標準化への取り組みがなされている^{1,12)}。用語の標準化を徹底することにより、施設内での円滑なコミュニケーションが期待できると考える。今後は更に、長い将来を見据えると同時に、医療ネットワークの拡大を考慮して、ある一定の施設内だけでなく、施設から周辺地域、そして全国で用語の標準化に取り組んでいくことが必要である^{12,13)}。そうすることにより、より普遍性の高い医療職者間のコミュニケーションが促進されていくと考える。

3. 困った時の対処法と用語の必要性の認識

理解できなかった用語に遭遇した際、多くの者が自分で調べるよりも発言した本人や傍にいた人に用語の意味を確認していたことが明らかとなった。多くの業務に追われている看護師にとって、自分で調べるよりも発言者や傍にいるスタッフに直接確認することの方が、時間的効率が良いと考えられる。また、90%近くの者が申し送りで用語を使用していると答えていることから、用語を使用し伝えた情報が、看護師間で次々と伝達されている現状がうかがえる。患者の個人情報を取り扱う申し送りで用語を使用する理由の一つとして、用語を使用することで直接的な表現を避けることができることがあげられる。また、看護業務の複雑性と、場合によっては生命に関わるという緊急性が、用語の使用に深く関係していると考えられる。臨床現場において簡潔で素早く相手に伝えられる用語は、看護業務を遂行する際に大きな役割を担っていると言える。

しかし、患者等の前で使用してしまうと、用語の意味が分からないことで患者に不安を与えてしまう可能性がある¹⁴⁾。用語を使用する可能

性のある看護師は、用語の正しい意味を正確に伝えることのできる能力や、患者等からの問いかけに臨機応変に対応できる能力を身に付けておかなければならない。また、用語を使用する際には、伝える側、聞き取る側の双方が用語の正確な意味を理解し、適切な内容を次の人へと伝えていくことが重要である。

4. 用語集の内容

今回作成した用語集は、臨床現場で働く看護師が実際の場面で使えるよう持ち運びに便利な、B6サイズのものとした。また、1ページに6～7語ずつの掲載とし、フォントも大きくしたことから、忙しい看護師が用語を検索する手間をなるべく取らないよう工夫した。しかし、看護職等が臨床現場においてポケット等に入れて持ち歩く際には、さらに小さなポケットサイズにする必要があったかと考える。著者らは今後、協力していただいた看護師に用語集を配布する予定である。今後、看護職等の意見を伺い、さらに使いやすいものへと改訂していく必要がある。

結 語

本研究では、臨床現場における用語の使用状況と、それに対する看護師の認識、および困難な状況をもたらした用語についての調査を行った。そして、これらの調査の結果から、全163語、29ページの用語集を作成した。臨床現場では多くの看護師が用語を使用しており、用語の使用によって困った経験をした者も多く存在することが明らかとなった。また、簡潔で素早く相手に伝えられる用語の使用は、看護業務を遂行する際に大きな役割を担っている一方で、医療事故を誘発する可能性もあることが示された。医療職者間の円滑なコミュニケーションのためにも、今後、ますます用語の標準化が促進されることが予想される。生命に関わる重要な臨床現場で働く専門職者として、看護師一人一人が用語の正確な意味を理解し、適切に使用していくことの重要性が示唆された。

謝 辞

本研究の実施にあたり，調査に協力していただいた看護師の皆様，施設の皆様に深謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 氏原千寿子．看護記録における略語使用の現状．日本 POS 医療学雑誌 2002；7(1)：82-84．
- 2) 江藤裕之，岸利江子，岩崎朗子，他．医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察．長野県看護大学紀要 2002；4：31-39．
- 3) 飯田恭子．カタカナ表記語使用の実態．週刊医学界新聞 2005 February 28；2623(4)．
- 4) Dimond, B. "Abbreviations: the need for legibility and accuracy in documentation". British Journal of Nursing 2005；14(12)：665-666．
- 5) 新村出(編)．広辞苑第4版．東京：岩波書店，1991．
- 6) 飯田恭子，高島恭子．看護学生・ナースのためのカルテ用語がすぐ引けるメディカル英語辞典．東京：アスク，2005．
- 7) エキスパートナース編集部．医学・看護用語のカタカナ語・略語便利辞典．東京：照林社，2004．
- 8) 岡田一義．医学英語ハンドブック．東京：東京医学社，2003．
- 9) ステッドマン医学大辞典編集委員会．ステッドマン医学大辞典第5版．東京：メジカルビュー社，2002．
- 10) 疋田優子，吉村浩美．略語・慣用語が重大な事故を生む～看護記録における略語・慣用語の実際～．看護きろく 2002；11(10)：16-21．
- 11) 日本看護協会(編)．看護記録の開示に関するガイドライン．東京：日本看護協会出版，2000．
- 12) 足名美由紀，橋本裕二，牧野永城．医用略語の標準化 標準略語規定の作成．日本病院会雑誌 2003；50(3)：423-425．
- 13) 岡嶋良枝，月東祥子，井出由美，他．電子カルテ開発に向けた看護記録の検討．名古屋市立大学病院看護研究集録 2000；1999：132-135．
- 14) Cosper, B. "How Well Do Patients Understand Hospital Jargon?". American Journal of Nursing. 1997；1932-1934.

Clinical Nurses' Understanding of Loanwords, Abbreviations and Jargon, and the Actual Such Terms in the Clinical Setting Compiling a Glossary of Terminology

Kumiko KIRITA^{*}, Hisako OKAZAKI^{*}, Rika YATSUSHIRO^{2*},
Shinji MIYAUCHI^{*} and Gerald T. SHIRLEY^{*}

In this study, the actual usage of loanwords, abbreviations, and jargon (terminology) in the hands-on clinical setting and clinical nurses' understanding of terminology were examined. A glossary of terminology that caused communication problems was compiled in order to contribute to the improvement of communication among nurses and between nurses and physicians. A total of 1,000 nurses in six hospitals in Prefecture, A Japan, were asked to fill out a questionnaire prepared by us. A total of 163 examples of terminology that were incomprehensible to them and caused communication problems were extracted from the survey findings and used in the glossary of terminology. Of the 748 respondents, 97% said that they used special terms, and 81.6% said they had encountered terminology that they were unable to understand. Among the latter, 9.1% had experienced problems through the use of terminology. Some of the problems cited were [lack of comprehension by the listener], [delay in treatment], etc. Concerning the necessity of terminology, 44.5% responded that it was either [necessary] or [very necessary]. Examples of terminology that many respondents had difficulty understanding were [suteru] and [takiru], among others. The use of terminology, which can deliver information quickly and concisely to a listener, plays a large role in the performance of nursing duties, but the inherent danger of bringing about a medical accident was also indicated. In addition, it was suggested that as a specialist working in an important clinical setting concerned with people's lives, each nurse should keep in mind that it is extremely important to understand the correct meaning of technical terms and to use them appropriately.

^{*} Oita University of Nursing and Health Sciences, Foreign Language Department, Oita, Japan

^{2*} Oita University of Nursing and Health Sciences, International Nursing Department